小学校の事例 東区 苗穂小学校

環境先進国ドイツの取組を、ドイツの方が説明。学習内容をビデオレターにまとめて現地に送付。

市内で初めてのビオトープ。
人の手を加えず、ありのままの自然を観察できるのが大きな特徴。
環境先進国のドイツの方からも学び、成果をビデオレターにまとめて
報告する取組から、世界的な視野で環境について考えるきっかけに。

はじまり 札幌市の小学校で最初にできたビオトープ

本校には平成12年の秋、学校ビオトープモデル整備小学校として、札幌市の小学校として初めてのビオトープがつくられた。ビオトープは苗穂地区の自然の観察を目的として、学校の周りの草や木を利用。当時の6年生が中心となって植物を植え、約1ヶ月で完成した。現在は学校独自でつくったビオトープの管理方法に従い、基本的に人の手を加えず、苗穂地区の自然を観察しつつ遊んだり学んだりできる場となっている。

池の全景

内容 人の手を加えず ありのままの自然を観察

ビオトープ全体の大きさは、およそ10m四方。池にはたくさんの水草が生え、メダカ、ゲンゴロウ、ヤゴなどが住んでいる。夏には多くのヤゴがトンボに羽化するようすを観察できる。池の周りにはハマナスのほか、平成13年6月に、札幌市の環境局や緑化推進委員会の力を借りて、校長、PTA会長、3年生の児童で植えたクリの木も育っている。次第に鳥やチョウなどが姿を見せるようになり、平成14年の春には2羽のカモが飛来して、テレビ放送されるなど注目を集めた。

本校では、ビオトープを総合的な学習の時間や生活科の教材、また遊びの場として積極的に活用している。ビオトープが完成した翌年（平成13年）の2学期には、3年生が「生き物の棲みやすいビオトープ」を目指し、水の調査や、コンポストを使用しての堆肥づくり、掲示板や図鑑などを自作しビオトープの情報を広めるなどの取組を行った。植物に詳しい先生をゲストティーチャーに招くなどの学習も行った。

秋の池のようす

発展 ドイツ人ゲストティーチャーを招いて学習

本校では、過去に3年生が、札幌市の国際プラザで紹介してもらった札幌在住のドイツ人女性を招いて、写真や道具などを実際に見せてもらいながら、ビオトープの本場であるドイツの環境に対する進んだ考え方や取組を教えてもらったこともある。

その後、「ドイツの方に学習した成果を見てもらおう」と子供たちに声をかけ、「生き物が棲みやすくするために」と、虫、草花、水の生き物、土など、それまでグループごとで学習してきたことを紹介するビデオレターを作成し、ドイツ・ミュンヘン日本人学校に郵送した。当時の校長が日本人学校への赴任経験があったこと、また、国際理解教育連盟の会長をしていたことが縁で、ドイツの日本人学校に勤務している先生に送るかたちになった。

また、その年に開かれた国際理解教育の研究会では、発送前のビデオレターの内容を確認する学習が、大勢の先生方が見守る中で進められた。ビデオレターは、子供たちがシナリオを書き、発表している様子をビデオで撮ってまとめるという内容になっている。

シナリオを話し合ったり、練習したり、またゲストティーチャーとして前述の国際プラザのドイツ人女性を招いていたので、発表内容がほぼできあがっているグループは「ドイツの方にも伝わるか?」「つけたすところはないか?」と彼女に見せるなど、内容を見直す学習になった。

海外での取組を学習し、海外の学校に自分たちの学習成果を送る活動により、子供たちは環境問題が世界的な課題であることを理解し、意欲的に学習に取組んでいた。

「ビオトープコーナー」の掲示物

今後 身近なビオトープの生物と親しみ「環境」を学習

子供たちはビオトープの生物や昆虫に強い興味を示している。特にクワガタには強い関心をもっており、野幌森林公園や滝野すずらん公園に校外学習に行ったときには、子供たちの間で本物の自然と学校のビオトープの自然を比べて話題が盛り上がった。ビオトープは日常の生活の中で子供たちが環境について学ぶことができる場所として、大きな役割を果たしている。

虫たちの棲家となる朽木

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校からメッセージ

現在でも10年前（平成12年度）に作られた資料にそってビオトープの活動に取組んでいますが、よりよいビオトープの管理方法があるのではないかと模索しています。今後は環境学習の出前授業などのイベントも積極的に取り入れていきたいと考えています。また、子どもにしっかり指導するためにも、まず私たちがビオトープの管理方法や生き物などについて、さらに理解を深めていきたいと思います。